閉鎖的氾濫域、一住民の苦悩

尼崎市　細川　ゆう子

淀川水系流域委員会はじめての懇親会で、ある河川管理者は言った。「こんなはずではなかった」と。水害が起こりやすい地域のために、二十年、三十年かけて、ダムを作ったり河道改修したり、築堤や堤防のかさ上げをしたりする。やっと事業が完成すると、水害がなくなったと思って、住民がどんどん住んでしまう。水害の危険が増し、さらに対策が必要になる。「こんなはずではなかった」と。そのとき私は、生意気にも「住民も、自分たちの住む地域がどの程度危険なのか、知らなくてはいけない。あなた方は住民を甘やかしすぎたのではないか」と言ったのだ。今「なんと失礼なことを言ってしまったのか」と後悔している。

私の住む町は、猪名川とその支流藻川に囲まれたデルタ地帯だ。輪中堤だけが、洪水から私たちを守ってくれている。どこか一ヶ所でも破堤すれば、ほぼ全域が浸水し、下流側は二階まで水没するところも出る。園田競馬場の客のための停車場が駅になり、昭和初期から阪急電鉄が宅地開発を進めるまでは、集落が点在する小さな農村だった。今、農地はほとんど姿を消し、宅地と舗装道路に埋めつくされたため、一時間に 50 ㎜以下の降雨でも内水で浸水する危険がある。今年 8 月 22 日の集中豪雨では、落雷のため 25 分排水機場のポンプが止まったため、床上を含む浸水被害が出た。

堤防も、侵食や浸透で破堤する危険があったため、去年度、一部堤防強化が実施され、住民は「これで安全になった」と喜んでいる。けれども私には、心配で仕方がない場所がある。私が住む場所の 50m ほど下流に、古い橋がある。橋脚が大きく、橋げたも低い。すぐ下流に阪急電車の鉄橋もある。やはり古く、橋げたの高さは堤防より低く、余裕高＋40cm しかない。河川管理者に「架け替えてもらえないか」と聞くと「余裕高も満たしていない橋がたくさんあるので、順番は当分回ってこない」とのことだった。鉄橋にあわせて、堤防も明らかに低い。しかも、本来堤防であるのに道路を通してしまっているので、厚みも少ない。もちろん腹付けをすることもできない。万一、越水し破堤したら、尼崎市中南部のほとんどが浸水するだろう。だから、土嚢を近くに保管してあり、いざと言うときは決死の水防活動が行なわれるはずだ。それでも、持ちこたえることはできないかもしれない。持ちこたえても、次に低いのは対岸つまり、私の町の側だ。右岸が持ちこたえれば、左岸が越水する。ここも、本来堤防であるべき場所に住宅が建ってしまっている。越流は住宅を押し流し、町に流れ込むだろう。

４年の任期の間に、淀川水系に今までどんな降雨があり、どれほどの被害が出たのか、どんな場所が水害の危険が高いのか、ずいぶん勉強させてもらった。足羽川や円山川、由良川の水害の傷跡も見せてもらった。おかげで、台風が近づいたり大雨が降るたび、見せてもらった洪水のビデオと自分の町がだぶって見える。パニック映画のワンシーンのように、洪水が私の町を飲み込む風景が、頭に浮かんで離れない。高度経済成長期に一気に宅地化が進んで、そのころからの住民が夫婦や一人暮らしの高齢者になっている。浸水が始まれば、避難は困難だろう。死者も出るに違いない。しかも、いったん浸水すれば、水がはけない。何ヶ月も水がひかなかったニュー・オーリンズの風景も重なる。そんな洪水は、めったに来ない。けれども、最近大水害を起こしたのは、みんな 4、500 年に 1 回のような、計画規模以上の降雨ではないか。猪名川にも降らないという保証はどこにもない。地域の水害の危険を知ることがこんなにもつらいこととは、思いも

しなかった。

心配なその場所の堤防強化は、ハイブリッドしかないと私は考えている。河道ぎりぎりに町が迫り、拡幅や堤防の腹付けはできない。下流域の堤防のご他聞にもれず、中身はほとんど砂である。ハイブリッドは、洪水のあいだに堤体の砂が全部流されても、矢板が倒れなければいいのだ。ハイブリッドで越水対策すれば、浸食も浸透もパイピングも対策する必要はなくなる。模型実験によれば、地震にも強いらしい。越水対策ができれば、排水機場の運用も余裕が持てる。法面を触らずにすむので、植生が変わる心配もない。だから、早く耐越水堤防の実験を進め、流域委員会で有効性を検討してほしい。なのに、実験はすでに一年遅れ、今年度やっと企業レベルで模擬実験が行なわれただけだと聞いている。来年度こそ本格的な実験が行なわれ、堤防強化の審議をしてもらえると思っていたのに。流域委員会の経費でさえどうなるかわからないのに、耐越水堤防の実験に予算はつくんだろうか。不安だ。

これから実験して、検討して、耐越水堤防の実現は何年も先になる。いたずらに地域の人たちの不安をあおれないので、私は自分の不安を声高に言うことができない。台風などで洪水の危険が近づくたび「王様の耳はロバの耳」と唱えて、口を閉ざすのだ。私はまだ数年の経験だが、河川管理者は、危険地の情報を十分に知りながら、黙々と何十年もかかる事業を遂行してくれたのだ。その仕事のつらさを、甘く考えていた自分を恥じる。

けれどもこれからは、住民も住む場所の水害の危険を正確に知り、自分でできる対策は自力でやらなくてはならない。危険な地域にはできるだけ住まず、住むなら建物に浸水対策を講じなくてはならない。河川整備計画の策定に住民が関われば、要望したり反対したりするだけでなく、計画を遂行するための責任も負わなければならないことを自覚できるだろう。整備計画の策定には、出来るだけ多くの住民を巻き込むことが望ましい。そうしなければ、水害の輪廻は止められない。淀川水系流域委員会は、だからこそ住民参加に力を入れてきたのではなかったか。河川管理者が「こんなはずではなかった」と自分の仕事を徒労に終わらせないために、新たな試みに踏み切ったのではなかったのだろうか。

地域の危険を知っただけで、成す術のない私はどうしたらいいのだろう。本当にこの二年、耐越水堤防の実験が進んで、流域委員会で検討する番が回ってくることをひたすら待ち続けていたのに。一期のときに設置された堤防強化委員会は、従来の堤防強化を踏襲するだけで終わってしまった。「やっぱり流域委員会で議論してくれなくてはダメだ」と、越水対策に踏み込んだ議論をしてくれるのを期待していたのに。もう十分意見を聞いたと、河川管理者は本気で思っているのだろうか。私は、納得できない。

これからの川づくりは、住民もまた川との付き合いを学び、考え、選択し、責任を負い、河川管理者と協力して地域を水害から守り、環境を回復する努力をしなければならない。住民は、河川管理者に要望や反対をするだけで任せっきりにせず、決めたことに責任を持たなくてはならない。そして河川管理者は、住民と本気で議論せず、自分たちが作った整備計画に理解・協力だけしてもらおうなどという、甘い考えは捨てるべきだ。流域委員会の休止は、6年間の関係者全員の努力を踏みにじるものだ。淀川水系流域委員会をスタートさせた河川管理者の思いを、現担当者は受け継いでほしい。